
哀歎傷

琉生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀歎傷

【Zコード】

Z8577Q

【作者名】

琉生

【あらすじ】

彼女にとつて“証”は、誇りであり、喜びであり、哀しみの塊であり、全てだつた。【アイカシショウ】アナタは証を刻んだ事をありますか？ やや残虐なシーンを含みます。/2011/

学校から帰ると、シトシトと雨が降り出した。
そのお陰で、雲が太陽を覆い、人間にとつて一番大切な光源の光を遮つた。

だが、全てを遮つた訳ではない。だから、外も自分の部屋も薄暗くなつた。いくら電氣で明るく照らされているこの部屋の中でも、遮ぎられる前と比べて明るさは無くなつた。

普段の私なら、この微妙な明るさは大嫌いだ。
でも、今の私にとってこの明るさは半端なく心地いいものだつた。

心地いいと言つても、そのまま訳にはいかない。

明日も学校がある。

明日提出する宿題をやらないといけない。

通学鞄から勉強机にバンバンッと教材を投げ出す。そして、キャスター付きの椅子に座り、ペン立てからシャーペンをとりだそうとした時に、ふとペン達と同じように立つてている鉄に目が行つた。

(……忘れてた。)

私は鉄を見て、すぐに思い出す。

私以外に誰もいないこの家の中ですることを。
私にとって、もつとも喜ばしい行為を。

シャーペンよりも、鉄に手を伸ばす。

緑の持ち手を親指と人差し指で摘むように取り出す。

そして、これ以上開かないといつとこ今まで、刃を広げた。

それを右手に持つ。緑の持ち手ではなく、片っぽの刃をもつ。それから、明るい光の下、夏の日焼けが抜けきれていない少し茶色い左腕を出す。腕は皮膚の薄い裏ではなく、表をだ。

用意はできた。

だから、私は右手を動かす。左腕の方に。……否、左腕にか。

刃は私の腕に垂直に落ちてきた。

ただ落ちてきたのではない。かなりの圧力を持つて落ちてきたのだ。証拠もちゃんとある。

現に脂肪に刃が埋もれている。

こんな事を平然と見て語っている私。

冷静というのか、異常というのか。

それから、埋もてているだけの刃をゆっくりと下へ引く。

埋もれていた時よりも、大きい圧力になつてから下へ下へ。

スウーと滑らかにいうべきか、ズズツズズツツと突つかかるようこいつべきかはわからないが、ある程度に進んだ。

だから、脂肪に埋まっていた刃を脂肪から解放した。

「……ハア。」

と溜息を思わせる程の二酸化炭素を口から出す。

体からフツと力が抜けた。

力を失った体は、後ろの背もたれへ倒れていった。同時に机の上にあつた両腕も引っ張られ、力なく机からダランと引っ張られるような感じで落ちてつた。

それが、とてもゆっくりに感じた。

ダランとなつた両腕、体、そして首も。

顔が上を向いていた。

何もない天井。

見えていてもなんにもならない天井。

眼球は薄暗い部屋の天井を映し、鼓膜は兩音で震えている。

暫く、そのままでいたが、ダランとした右手にはまだ刃が握られていた。

もう、いらない。

要らない物は要らないのだ。

右手にある鉄を机のバツと投げ捨てる。

丁度、ノートにあつて激しい音が出た。

…… その音の余韻が残る中、左腕を顔の前に持つてくれる。

腕には、綺麗な「一」の字。

太さも長さも適度で、我ならよく出来てこると思った。

「一」を右手でなぞる。なぞると一気に溢れ出す。

ああ……よかつた……。

ちゃんといた……。

ちゃんと……。よかつた……。

とてつもなく膨大な安堵感。

『今日も生きている』と感じている事。

腕に綺麗な証がある事を誇らしこと。

カッターで証を刻んだであろう、年上の友達達と同じでカッコイイ
と。

嬉しかつた。

証が刻まれた腕も、証自体も、年上の人達と並んでいよいよつな感じ

も、証を刻み楽になつていいくことも、存在しているんだと確証が得られる事も……。

全てが どうしようもなく 誇らしく 嬉しかった。

でも、でも、それでも…彼女には。
この証を刻んだ後の安堵感などの後に、最終的に訪れる物は …。

彼女は安堵した後、力が無くなつていた体は、元に戻りなり、宿題をする為に体を起こす。

教科書とノートを広げ、宿題をするぞと意気込みノートに書いていく。

すると、2、3行かいた時に…ポタッ、ポタッと水がノートに落ちシミを作った。

落ちたかと思うと、彼女は机に伏せた。

彼女は頭の上あたりで、右手は左肘の上あたりをもつて、左手は右肘の上あたりをもつて組み、長袖の袖を驚撃む。ご以上にない程、袖を握りしめた。

「…………ああ————！」

彼女は泣き叫んだ。

出したこともないような声を出しながら、次から次へと溢れ出す涙を流しながら、ガタガタと震えながら。

ノートにドンドン染み込む涙と、机に跳ね返る泣き叫び出た声は、本当の彼女のようだった。

……証を刻んだ後の最終的に訪れる物、それは……証の疼きだった。

【終】

(後書き)

アトガキ

読んで下さって

ありがとうございます^ ^!

若干、実話を踏まえた作品になりました。
なんとなくでもいいので、何か心に残ればなつと思います。

ありがとうございました!

琉生

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8577q/>

哀歎傷

2011年10月6日22時02分発行